
邪神な彼女と探偵活動

佐鷺 遙水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神な彼女と探偵活動

【Nコード】

N0806V

【作者名】

佐鷺 遙氷

【あらすじ】

僕は普通の人間だ。たとえば、世界的な英雄を親戚に持っていたり、その親戚の遺言でつぶれかけの探偵部に所属していたりしても間違っても毎週毎週事件を解決してくれるような探偵じゃない。

だから、困るんだ。本当に困るんだよ。

密室殺人事件の解決なんて頼まれても。

学校でおきた密室殺人事件。犯人は不明、凶器も不明。そんな警察も匙を投げるような事件を解決してくれだって！？

そんなこんなで途方に暮れていた僕だったが、叔父が持っていた

鍵を使ってみた夢の中で一人の少女に出会った。

「我は千なる異形の神。這いよる混沌、ナイアルラトテップ。

私の趣味は人に協力してやり、その喜びをとみに感じることだ。

悩みは何だ？私が直々に手を貸してくれようぞ」

邪神の名を名乗る、名状しがたき美しさを持った少女に巡り合っ

た僕は邪神な彼女と探偵活動を開始するが……………？

主要人物紹介（前書き）

前に書いた短編をプロローグとした人物紹介です。

主要人物紹介

主要人物紹介

あおがみ しんと
青雷 進斗

16歳 男 探偵部所属 一人称 僕 特技 家事、女性の機嫌取り 好きなこと 読書 自己探索

世界的な英雄であつた叔父の遺言で県立蔵縄学園くらなわの探偵部を存続させ続けるために入部。だが、もちろん事件など起きず、入部から1年たった今でも何も無い。はずだったのだが…。

ちよつとマイナス思考だが優しく、歩道橋でオレンジをこぼしたおばあさんを素で手伝えるような性格。

また、「完全であるものは不完全でなくてはならない」という謎の信念を持っており、この点についてだけは非常にこだわる。

本人いわく、その英雄だった叔父の家系は「早死にする」とのことであり、実際に叔父の妹であつた母も34歳で死んでいるため、今は従兄の支援を受けて一人暮らしをしている（叔父の功績で血縁全体に国から補助金が支給されていることもあり、大してあてにしているが）。

ナイアラルトテップ

ゆがみ ナイア
歪神 ナイア（現実世界で名乗る名前）

17歳（人間換算） 女（人格のみ） 一人称 私 我（自分の名と肩書き、異名をいうときだけ）

特技 千の姿に変われること（実際には9945種類しかないらしいが） 好きなこと 人の手助け

進斗が『夢の国』ドリームランドに迷い込んだ際に出会った名状しがたき美しさ

を持った邪神の名を持つ少女。墨のような漆黒に見えながらも雪のような白銀にも見える髪を持ち、透き通るような白さを持ちながらも大地のような褐色をしている肌を持ち、女神のような神々しさを纏いながらにして悪魔のような邪悪さを漂わせる容姿をしている。

もつとも、そんな人外の化身のような美貌を持つていても人の手助けを無償でしてくれるような優しい人（？）なので、怒らせなければ何の問題もない。

ちなみに、なぜか現実世界の服（女子の制服）がお気に入りで、進斗と初めて出会った時、蔵縄学園の制服を着ていた。

中途半端に現実世界の情勢に詳しく、オタク文化について詳細に語れるような偏り方。

邪神な彼女と会う前の（前書き）

ナイさん出る予定だったんですが、もう1話か2話かかりそうです。

邪神な彼女と会う前の

完全なものは不完全でなくてはならない。

いきなり何を言い出すのかと思うかもしれないが、これが僕、青^あ雷^{おがみ}進斗^{しんと}の信条だ。

何て言ってみても日常生活じゃこんな信念を持っても全く関係ないし、披露する機会もない。いくら叔父が世界的な英雄であったとはいえ、僕は単なる一高校生だし、その叔父の遺言でつぶれかけの探偵部に所属していても毎週毎週事件を解決するような人間じゃない。人に言えない特技や秘密だっていくつか持っているけど、それを加味しても僕は人間だ。

だから、困るんだよ。本当に困るんだ。

密室殺人事件の捜査なんて頼まれても。

「2035年5月4日、午前7時、バスケットボール部の女子が部室の鍵を開けると、2年6組の次原^{つぎはら}鈴音^{すずね}さんが首を裂かれて死亡しているのを発見。ただちに警察が捜査を開始したところ、ドア窓、その全てに鍵がかかっていたことが判明。スペアキーを所持する2人にアリバイは有り。マスターキーを持っていた教師も犯行に及ぶにはほぼ不可能との事。つまり、密室殺人事件だったってわけだね。この事から現場は頭を悩ませている

ということだって、青雷君」

うん。何が「ということだって」なのかさっぱりだけどね。

この三日間僕たちの高校を震撼させている事件の概要なんか話されてもだから何なんだって感じだよ。

朝から僕の机の前に立ってやけに度が過ぎる説明口調で話していたのは同じクラスの仲波^{なかなみ}真帆^{まほ}さんだ。これといった目立つ特徴は無いし、僕がひそかに恋焦がれているなんてことも無い。つまり、

モブキャラだ。

「青雷君？」

「あ、ごめん。ボーっとしてた。

で、あの事件がどうしたの？」

「はいそうです。さっきも言っただけど、現場が頭を悩ませているんですよー」

「はあ」

「と、言っわけでおにちゃんの安眠のために事件の解決に貢献してください」

……………何言ってんだこの人は？探偵部とはいえ高校生探偵でもなんでも無い僕に事件の解決に手を貸してくれだつて？そんなことできるわけないだ「うん、わかった。警察の人にもわからない事件なんて解決できるかわかんないけど出来る限り協力させてもらうことにするよ」何言ってんの僕はあああああつつつ！！！！？？？

「ほんと！！？？」いえ、無理です。

「ああ。任せて。役に立ちそうな人を知ってるんだ」いねーよそんな奴。

あまりに自身満々な僕の態度に安心したのか「ありがとー」といつて去っていく仲波さん。だが僕は間違いなく役に立てない。

こんな時ほど母の家系を呪ったことは無い。母の家は平安時代に朝廷から直々に名前をもらった隠れ名家らしいのだが、幾つか呪うべき遺伝的要素がある。その一つがさっきのあれだ。

僕が『括弧付けの嘘』と（まさしくカッコつけたが）呼ぶこの癖がその一つだ。母の家系は男女問わず異性の頼みに対してほとんどの場合カッコつけて答えてしまうという、僕のような平凡を地で行くような人間には地獄のような性質を遺伝させている。生まれてこのかた何度かこの癖のせいで何度か危ない目にも遭っている。もう、かなり昔の本のキャラのセリフを叫んでしまいたいぐらいだ。

せーの、「不幸だーーーー！！！！」（心の中で）

邪神な彼女と出会った夜（前書き）

ナイさん登場です。

邪神な彼女と出会った夜

「　　と言う訳なんです、どうしましょう、真治さん」

「しーらね」

「ひどっ!？」

今しがた非道な返事を返してくれた人は件の叔父の息子さんで、
名を蒼焰そうえん しんじ 真治と言う。

僕の家は父も（僕が生まれてすぐに事故で死んだらしい）母も（僕が10歳の時に倒れてそれっきりだ）死んでいるのでこの従兄である真治さんの援助を受けて生活している（まあ、叔父の功績のおかげで国から援助金が出ているが）。真治さんは本当は優しくて家族思いのいい人なのだが、こういった系統の血筋関係の話になると少々厳しくなる。自分の血筋の問題は自分で解決しろと言う事なのだろう。真治さんは『括弧付けの嘘』に悩まされている様子は無いのだし、自分で克服したのだと思う。

「……まあ、さすがに、知りませんじゃひでえわな。進斗、ほれポイツ。」

「のわっ!？つて、鍵……ですか？」

真治さんが放り投げてきたのは銀製おほしきと思しき、20センチほどの長さの鍵だった。何やら不思議な文字が書かれていて、手にした途端に神秘的な雰囲気と重みが伝わってくる。

「『銀の鍵』だ。使え」

「いえ、分かりますし、どう使えと？」

「知らないか？ハーワード・フィリップス・ラヴクラフト著『銀の鍵』、『銀の鍵の門を超えて』」

「読んだことは……え？」

マジで？

「『夢の国』とか言う不思議ランドに行けるあれですか!？」

「父さんが作ったやつだけだな」

叔父さん……………？一体、どんな秘密を握っていたんですか……

……！！？？

「死ぬ5年前からそんな謎アイテム作りまくってたらしいからな
ー」

ますますどんな人か分かんなくなってきた……。母さんの話じゃ
すごく優しいくせに計算高く、奥さん大好きで、滅茶苦茶強くて、
公務員のくせにヤのつく職業真つ青の人だったと言うけど……ますま
すどんな人か分かんなくなる。確かなのは、叔父さんは得体の知れ
ない『力』を持ってたと言う事、それと、1999年と2012年
に何かをしたと言う事。この2つだ。

「真治さん、叔父さんってどんな人だったんですか？」

「ん？そうは言っても俺が7つの時に死んでるしな。あー……
……人、だつたとしか言いようがねえな。父さんはどんなに化け
物じみていても、人であり続けようとした人だ。それは変わんねえ
よ」

「そう、ですか……」

僕もそうなる日が来るのかもしれないな。

心の中で心配事を一つ吐き出して、真治さんに向きなおる。

「ありがとうございます。使ってみます」

「夕飯は？姫華^{ひめが}が作ってんだが」

台所では真治さんの奥さんの姫華さんが料理を作っている。でも、
今日は朝の残りが残っているのだ。もったいないので家で食べるこ
とにする、という旨の言葉を伝えると、「ん、分かった」と送り出
してくれた。「真璃^{まり}ちゃんまたね」と手を振るとブンブンと振り
かえしてくれたので満足。従兄姪は可愛過ぎて困る。

「じゃあ、また明日来ます」

「ん。ちゃんとメシ食えよ」

さよならー、と言わんばかりに手を振って真治さんの家を立ち去
った。

僕は1人で一軒家に暮らしているのだが、明らかにメリットよりデメリットの方が大きい気がする。1人であろうと無かるうと結局電気代はかかるのだ。そんなのだったらもう1人か2人居たほうがいいに決まっている。だが、この高校生の身分で誰かもう1人住むという。

「……同棲……ぐらいしか無いよな……」
 いない
 「ありえない。誰とすんだよ。まず彼女が存在しないのでムリデスネ、ハイ。」

いや、まて。こんな謎アイテムで不思議ランドに行こうとしてる時にこんな事を思いつくって言うのは何かのフラグなのか？もしかして人外の彼女が今から出来てしまったりするのだろうか。さすがに人外存在はお断りしたい。僕は一応人間だから。……まだ。

「……ダメだなあ……」

どうも思考がマイナスに入ってしまったて困る。おとなしくこの謎アイテムに身をゆだねることにしますかね。

じゃ、おやすみなさいとお。

そんなことを心の中で呟いて、目を閉じた。寝付きがいいことについてでは自慢できるので、すぐに意識が希薄になってゆく。自分が永遠の闇に落ちていくような感覚と一緒に、いつしよに、いしよに

おちていく。

人じゃ無い人じゃ無い人じゃ無い人じゃ無い人じゃ無い
人じゃ無い人じゃ無い人じゃ無い。

お前は人間じゃあ、無い。

「あああああ ああつ あああ あああ あああ ああつ」

[illegible]

絶叫と共に跳ね起きた。

「ッ！ハッ！ハアッ！ゴフッ！ゴハッ！」

呼吸が整わずにむせ返る。

上体を起こしたままではしばらく深呼吸を繰り返していたが、あることに気が付いた。

いつものベッドじゃ無い。

そして。

「生きているか、人の子よ？まあ、この『夢の国』^{ドリームランド}で死ぬというのはとてつもなく愚かしいことなのだがな。ちなみに言っておくが、そこまで恐怖に怯えてここに来たものはおらんぞ？更に言っておくが、その夢は私のせいではない。そなた自身の夢だ。そういう意味ではこの夢に來られて幸せと思っておくがよい。そうでなければ一晩中その悪夢に脅かされることとなっていたであろうよ」

声がした。

どんな声とは名状できない。清らかなのか、おぞましいのか、判断できなかった。

首を回し、その声の持ち主の方を見た。

自分の目が信じられなかった。

そこには玉座があり、そこには少女が退屈そうに、実に暇だと言わんばかりの態度で座っていた。そこまでは理解できる。

だが、その少女は、墨のような漆黑に見えながらも雪のような白銀にも見える髪を持っていた。

その少女は、透き通るような白さを持ちながらも大地のような褐色をしている肌を持っていた。

そして、その少女は、

女神のような神々しさを纏いながらも、悪魔のような禍々しさを漂わせていた。

そして、その名状しがたき少女はあの名状しがたき声で告げた。

「ようこそ、一人の狂喜に囚われた作家が創り出した世界、^{ドリムランド}『夢の国』へ。」

我こそは千なる異形の神。這いよる混沌ナイアラルトテップ」
名状しがたき美貌を持った少女は邪神の名を語り、僕は、僕は。彼女に恋をした。

邪神な彼女の質問タイム（前書き）

。なんだろう…。進斗殺したくなってきた……（うらやまし過ぎて）

邪神な彼女の質問タイム

夢の中で出会った人（？）に一目惚れしましたとか言ったら、頭のあれな人って思われるんだろうけど、今の僕にとってそんな事はどうでもよかった。生まれてこの方誰かを好きになったことは無かったのだけれど、これが恋なんだと確信した。

そう、僕は恋をしたのだ。邪神な彼女に。

「ここに人の子が訪れるのは10年ぶりか。いや、15年ぶりだったかも知れぬ。まあ、些細なことであるな。

よくぞ来た。1人の狂喜に囚われた作家の創り出した世界、^{『ムランド』}夢の国へ。

この世界に来たと言う事はそなたも何らかの秘密と、何らかの悩みを抱いているのだろう。

私のもとに来たからにはその悩みの解決に力を尽くしてくれようぞ。我こそは這いよる混沌、ナイアラルトテップなれば。

さあ、望みを言うがよい」

「付き合ってくださいっ！……！」

「プフウッ！……な、何を言いあすのだっ！……？？」

「あ、噛みましたね」

「うるさいっ！そんなことはどうでもいいのだうっ！……？？」

あれ？何か口を押さえてプルプルしてるんですが………もしかして、物理的に噛んだのか？

一目惚れした人なので心配になった。

「あの……大丈夫……ですか？」

「はれの……ふえいらと……おふおってふいるのふあ……ひよなひやは………！……！」

たぶん、「誰のせいだと思っているのだそなたは………！！」って言うってんだと思うけど………涙目でプルプルしてんのがやばいです。

可愛過ぎます。理性が飛びそうです。思考回路はショート寸前です。

「まったく……どうして私の所に来るものは変人ばかりなのだ……？」

引きこもりや邪悪皇太子はもちろん、ファイヤーバカの所にさえまともな人間は来るというのにどうしてこんな出会った直後に告白してくるような意味の分からんやつが私の所に来るのだ……？ 答えてくれ我が王よ」

いや、邪神の名前を持った人が言うセリフじゃないと思います。ついでに我が王つてのはあれか。『白痴の魔王』こと『アザトース』なのだろうか。どうでもいいが。

あれ？ そういえば、

「本当に這いよる混沌、ナイアラルトテップさんなんですか？」

「…フン。今更丁寧になりおつて……まあ、よからう。面倒くさいがこの世界の成り立ちから説明してくれようぞ。ついてくるがよい」

そう言つて彼女は玉座から立ち上がり、奥へと歩き出した。

……なぜか僕の学校 蔵縄学園の制服を着用していたが。

「なんで、僕の学校の制服着てるんです？」

「何っ！……？ これはそなたの学校の制服なのかッ！……？」

何だ、その食いつきの良さは。

「は、はい」

以上に良い反応に驚きながらもどうにか返事を返す。

「そうかそうか！ ！なら聞かせてもらおう！ 本来にこんな恰好をしてコウシャとかいうものの中にひしめき合っているのかッ！？」

「え、ええ。少なくとも僕の学校では制服着用が義務付けられているので……」

「少なくとも？ その他にも何かあるのか！？」

僕の返答の中から少なくともという一言を聞き取って興味深そうに聞き返してくる。その顔もやっぱり可愛いと思えるのでベタ惚れなんだろうな、僕。

「え〜つとですね…他の学校には私服登校つてのがありまして…」
「しふく？わたしふくと書いて私服なのか　　つと、すまないが
ここで話は終了だ。着いた」

「あ、はい……………つて何だここ！？」

僕がナイアラルトテップさん（呼びづら過ぎるので以下ナイさん）
に連れてこられたのは、

本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本
本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本
本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本
本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本
本本本。

本で全てが埋め尽くされた空間。本に全てが埋め尽くされた空間。
本が全てを埋め尽くした空間。

壁、通路、床、棚、机、あろうことか天井までもが本で構成され
ている、異常にして狂気の世界。

単なる本でもその数が人の限度を超えてしまうとここまでの圧迫
感を与えてくるのだと僕は悟った。

つて、あれ？もしかして読んだら発狂するような魔道書とかも混
じってるんじゃない……………なんて思いながらも足元の本に目を落として
しまう。そこにあつたのは、

『萌え萌えクトウルー神話辞典』。

「なんでだよ！！！！！？؟؟？」

別の意味でSAN値が下がった。

邪神な彼女の解説タイム（前書き）

この世の、神と呼ばれる存在についての筆者の考え方（妄想）を
本作の設定としています。ご了承ください。

邪神な彼女の解説タイム

「さて、光栄に思え。解説タイムだ」

「何でファ○ガイアの王っぽいんですか？」

「気にしてはいけない。気にしては……ん？」

そこまで言っただけで、ナイさんは本の空間の隅の方を見た。僕もつられて見てみると、その隅の方では、青黒い煙のような物がもうもうと立ちこめていた。

……………あれ？どっかで聞いた　　って言うよりあれだよな。90度以下の鋭角からどんな所にも侵入してくる某猟犬だよな。

「ティンダロスの猟犬　　ッッ！！！！！」

ティンダロスの猟犬。フランク・ベルナロップ・ロングが発表した『ティンダロスの猟犬』。その作中に登場するクリーチャー。僕たちの住むこの世界とは違う空間から90度以下の鋭角を伝ってこの世界に出現する不浄な存在は、僕たちを細切れにするには十分の力を持っている。

「ナイさ　　」

ナイさんをせめて庇おうと動き出したその瞬間。

「　　去ね、愚犬共が」

絶対零度の声と共に放出した黒色のオーラのようなものが煙を四散、いや消滅させていた。

「……………ワオ」

おそらく、すさまじくマヌケな顔をしていたと思う。僕は、その姿に見惚れていた。

「まったく。ここ2、3年間の歪みは異常なものだな。邪悪皇太子に深海引きこもり、それにファイヤーバカの所もノイズが走るらしいが…………『アストル・ディエスト・ラフニオン星消しの光条』の影響が出始めたのか…………？」

……………何か、伏線っぽい発言が出て来たけど……ま、いいよね？

「おっと、済まない。考え事に夢中に……なにをジツと見つめているのだ？」

「いえ、かつこいいな」と。さらに好きになりました」

「ッ……。もうよいっ！好きに懸想しておるがいいわっ」

そいつは光栄なこと。じゃあもつと言いますよ？

僕が心の中でじみじみにほくそえんでいると「さあ！」と、ナイさんが急に大きな声を出した。

「愚犬どもが入ってきた穴は封鎖済みだ。私はこの『ドリームランド夢の国』内に於いてのみまさしく邪神のごとき全能さを誇ることが出来るのが数少ない自慢の1つなのでな」

「あ、そういえばさっきから聞きたかったんですけど、本当に邪神なんですか？」

「……結論から言うのなら、イエスだ。詳しい説明をするのならしばらく時間が必要となるが構わぬか？」

「ええ。もちろん」

好きな人の事は詳しく知りたいものだしね。何て事を心の中で呟きつつ即答した。

「……では、何から話したのか……。そうだな……神と呼ばれる存在は実在する。

正確に言うならば、精神的な生命体だ。彼の者達は肉体を必要としない生き物なのだ。

彼の者達は知的な生命が誕生すると確定した惑星の手によって生み出される。通常は順当に進化したその知的な生命達が、元より存在した神達の姿を無意識的に感じ取り宗教を創り上げて行く訳なのだが……どうした？質問でもあるのか人の子よ」

「えーっと……いろいろ聞きたいことは有るんですが……何より聞きたいのは、あなたは何なのかって事です。

クトゥルフ神話は20世紀になってから創作された物のはず……なぜ、邪神、あなたはいるんですか？」

「……ハーワード・フィリップス・ラブクラフト。知っているな

？」

しばしの沈黙の後、ナイさんは僕に確認するかのように問いかけた。

「ええ。クトゥルフ神話体系の生みの親でしょう？」

「そうだ。だが、彼の者にはある『力』があつた」

「力？」

思わず聞き返し、ナイさんと眼が合う。彼女の瞳^めにはなんとも言えない光が宿っていた。

「そうだ。『一定数以上の人の思念が集まった物語を具現化する』という『力』がな」

「…へ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0806v/>

邪神な彼女と探偵活動

2011年10月15日12時46分発行